

は　じ　め　に

早　川　聞　多

本書は共同研究「生命と現代文明」の研究成果をまとめたものである。

本共同研究は3カ年の予定で平成5年4月から開始されたものであるが、その萌芽は本センターが洛西のビルに仮住まいしていた時代にまでさかのぼる。当時、スチールの本棚を迷路のようにめぐらせた貸部屋のここかしこで、暇さえあると研究部の面々が椅子を寄せあって議論の輪を作った。そんな勝手気ままな議論の中で、森岡正博氏と私との間でしばしば話題となったことがある。それは昨今の様ざまな専門分野における議論の「不毛感」についてであった。確かにそれぞれの分野における研究はその専門性と精緻さを鮮鋭にしているが、そこには我われ門外漢をも引き付けるような魅力が欠けているのではないか、何か大切なもの（私の言葉で言えば、生き生きした感覚）が欠けているのではないかということが、二人の共通認識であった。しかし当時はまだ、それが研究者のどこに原因があり、どのような態度で研究すればよいのか明確には分からなかったが、もし我われが共同研究を行う場合には、そのことを肝に銘じて行いたいと確認しあったのである。

そして本センターの第1期の共同研究の終了時期をむかえ、第2期の共同研究が計画される時になって、森岡正博氏が提案した企画がこの「生命と現代文明」であった。私は即座に森岡氏が先の議論の問題点を、その「生命」と「現代」という語にこめたものと理解し、この企画に参加することにした。従って本共同研究の代表者は私になっているが、これはまったくの手續上の理由に過ぎず、実際の企画・運営はすべて森岡正博氏が中心となって進められたものである。

森岡氏が中心となって進行した本研究会の大きな特色は、各回の発表が単なる自説の披瀝に終わるのではなく、その後の質疑応答において常に発言者の発想基盤、言い替えるならば各自の「生き方」を露呈させるような形で進められたという点であろう。恐らく、そのような態度で議論にのぞむことが、「現代」という今に生きる研究者が「生命」という至って根源的な問題を問うことであり、そのことによって議論に真の「生氣」が宿ることになると、企画者が考えたからであろう。

そうした議論の中から生まれたのが本書であるが、各専門分野の知見を超えて、そうした魅力を少しでも読者に与えることができたとすれば、それは森岡氏の真摯な企画と進行によると同時に、本共同研究に参加して下さった多くの研究者の、真摯な討論態度によるところが大きいと言わなければならぬ。